この回については、答案を事前に提出する必要はない。

課題 1

自由権規約 27 条は、“minorities”の権利ではなく、“persons belonging to… minorities”の権利を定めている。また、他の多くの条項が“shall have the right”と定めているのに 27 条は“shall not be denied the right”としている。なぜこのような規定ぶりになっているのだろうか。

課題 2

少数者保護がかつては安全保障の問題であったことは既に説明した。では、自由権規約 27 条に定められているのはなぜだろうか。やはり安全保障のためだろうか？

課題 3

自由権規約 27 条にいう minorities とは、どのように定義されるのだろうか。

課題 4

自由権規約 27 条の日本への適用について、日本政府は、第 1 回国家報告（1980 年）では、日本には少数者はいないとの立場を示していた。その後、少しずつ立場が変わってきている。

第 2 回国家報告（1987 年）　委員会による報告書 (U.N. Doc. A/43/40)

<u>Rights of minorities</u>

630. Regarding that issue, members of the Committee asked whether there were, in Japan, any special factors and difficulties concerning the effective enjoyment by minorities of their rights under the Covenant and, in particular, what the situation was in regard to Koreans, Chinese, the Utari people and the Dowa people.

631. In his reply, the representative of Japan provided figures concerning the composition of the groups of persons referred to in the question and stated that in Japan no one was denied the right to enjoy his own culture, to practise his own religion, or to use his own language.

第 3 回国家報告（1991 年）　U.N. Doc. CCPR/C/70/Add.1

<u>Article 27</u>

232. In Japan, no person is denied the right to enjoy one's own culture, to practise one's own religion or to use one's own language.

233. As for the question of the Ainu* people raised in relation to article 27 of the Covenant, they may be called minorities under that article because it is recognized that these people preserve their own religion and language and maintain their own culture.

> The Ainu people are not denied the right mentioned above as they are Japanese nationals whose equality is guaranteed under the Japanese Constitution.

委員会は、アイヌ以外についても、たとえば在日韓国・朝鮮人についても“minority”という語を用いている。

第 4 回国家報告への最終見解（1998 年）　U.N. Doc. CCPR/C/79/Add.102

> 13. The Committee is concerned about instances of discrimination against members of the Japanese-Korean minority who are not Japanese citizens, including the non-recognition of Korean schools. The Committee draws the attention of the State party to General Comment No. 23 (1994) which stresses that protection under article 27 may not be restricted to citizens.

しかし、日本政府は、アイヌ以外については少数者と認めていない（沖縄については次回検討する）。在日韓国・朝鮮人は 27 条の意味での少数者であるか。

課題 5

高槻マイノリティ教育権事件大阪高裁判決（2008〔平成 20〕年 11 月 27 日、判時 2044 号 86 頁）を読み、以下の問に答えよ。

4-1. 自由権規約 27 条について、判決は、上記の“shall not be denied the right”の文言を根拠に、「国家による積極的な保護措置を講ずべき義務まで認めたものとまでは解しがたい」と述べる。そして、自由権規約人権委員会一般的意見 23 について、（その法的拘束力の欠如を指摘した上で）、パラ 6.2 では「必要性を確認するにとどめて」いるとする。この理解は適切か。

4-2. 自由権規約 27 条が「国家による積極的な保護措置を講ずべき義務まで認めたもの」だと理解することは、自由権規約・社会権規約が区別されていることと矛盾するか。

4-3. 「争点(4)（被控訴人に裁量権の逸脱行為があったか。）」との関連では、自由権規約等の条約や他の国際文書に一切言及がない。裁量権の逸脱の有無について検討する場合には自由権規約や同委員会の一般的意見等を考慮しなければならないと主張できるか。また、そのような考慮をした場合、結論は変わり得るか。

以上